

国文学研究資料館所蔵『中臣祐臣記（正和五年）』（上）

土山祐之
藤原重雄

※請求記号「ヤニ一四五」「春日神主祐臣記」と登録。

国書データベースよりマイクロ画像を公開。 <https://doi.org/10.20730/200011767>

【翻刻】

〔表紙〕〔中央〕春日若宮神主祐臣記 正和五年 四季

〔右上隅紙〕「春」〔真〕

〔扉〕〔中央〕祐臣記／正和五年

〔遊紙〕

愚記第四 正和五年

正月

一日、天晴、御強物十二度、〔此内一度 下行拜殿〕乱声・万歳楽等如例、

若宮役権預祐世、

次寺家〔西南院 実聡〕朝拜、大社祝神主時実、禄物、被物一重・軾

白布一端、正預祐親被物一領・腰差給之、

以下権官腰差給之、

若宮役代官権預祐世、〔祐臣重服〕単一領・軾白布一端・腰差如

例、

御幣備進役氏人祐堪、軾者賜御幣之〔後力〕□、拜屋与

石橋間ニテ、自伝手取之、禄物腰差、拜殿辰巳角

庭中ニ天賜之、即先例也、而今度ハ拜殿ノ中程也、

一拝之後、神殿守春名状候、巫女等下暑并万歳

楽如例、

次本旬御供如例、若宮役時実、役送次預祐益、手長

氏人祐敦、

次御節供、神戸、〔年預 神主〕若宮役祐世、御幣行春、散米春名、

次河原城、〔年預 正預〕御幣春名、散米宗春、

一、白散若宮ヨリ臨時一合以宗春大社へ送之、大社ヨリ

其次恒例分一合送之、

次一乘院御参社、御参籠、大社祝正預祐親、

若宮祝代官祐世、

次大乗院御参社、大社祝祐親、若宮祐世、

一、〔覺尊 尊應〕松林院御参社、大社・若宮祝役氏人祐堪、

一、〔覺尊 尊應〕東北院御参社、若宮祝祐堪、禄物綿一両・軾代錢二連、

社司見参

神主時実 正預祐親 権預祐永 権預祐世

権預祐敏 神宮預延親 次預祐益

〔一才〕

〔一才〕

不參

權神主經清重服、權預能春、新權神主泰平、權預行忠

若宮神主祐臣重服、

中臣氏人見參

祐德 祐興 祐仲 能高 祐勝 延定

祐秋 能忠 貞行 祐直 能長 祐憲

祐夏 延茂 能藤 祐常 祐堪 祐敦

延雅 祐枝 祐文 祐照 祐内 延朝

祐為 延隆

一、寺家召馬進之、可懸総鞆之由再三雖被仰、無先例候間、平鞆ヲ懸進了、但召馬等左道ナリトテ別馬ヲ被

用之云々、

二日、

御強物六度、此内一度、下行拜殿、若宮役祐世、

次一乘院御參社、大社祐親、若宮役祐世、代官、

次大乘院、大社祐親、若宮祐世、代官、

次藤井庄、年預、祐臣、若宮御幣行春、散米春名、

若宮役祐世、若宮祝候氏人祐秋、祐堪、祐文、祐照、

一、飯室寄人里ニテ請取之、

三日、御強物五度、此内一度、下行拜殿、若宮役祐世、

次兩御所御參社、大社祐親、若宮祝代官祐世、

次瓶原庄、年預、祐臣、御幣役行春、散米春名、

次西殿、年預、御幣役春名、散米宗春、

一、一乘院・大乘院御參社、大社祐親、若宮祐世、

社司

時実 祐親 祐永 祐世 祐敏 延親 祐益

一、松林院御參社、大社祝代官祐秋、若宮祝祐堪、御幣

一社用途二連、

一、拜殿下行事、兩度御節供、雉鳥一羽・酒一斗

二升也、

四日、御節供、西嶋、年預、若宮役祐世、

御幣行春、散米春名、

今日兩御所并東南院へ為參賀代官祐堪・祐照參了、神人

兩三召具之、

社司如昨日、

五日、

般若庄、年預、御幣行春、散米春名、

平野、同、年預、御幣春名、散米宗春、

若宮役祐世、社司如昨日、

一、仕丁神樂在之、

六日、雪降、

大田、年預、次小夫、若宮御供、年預、

若宮役祐世、大田、御幣春名、散米宗春、

一乘院今日ハ御幣許被送之、若宮分給之了、

今日自一乘院殿御宿所、三首題被送之、早春鶯・

雪中鶯・社頭祝、亭・予詠進之了、

七日、御強物七度、此内一度、下行拜殿、若宮役祐世、

西山、年預、御幣行春、散米春名、

此庄事、旧冬衆徒有種々沙汰、神主無足、御供調進

泰利出辞状云々、

(2才)

(2ウ)

(3才)

(3ウ)

片岡、年預、御幣春名、散米宗春、

若宮役祐世、

一、若宮神人中、片岡御廿六供、酒一斗下行之、

一、一乘院御宿所ヨリ御幣被送之、

一、今日自一乘院御宿所、明日御退出、若宮祝師役事

蒙仰、奉行大式(寺主)実弘、西御門子息歟、

御教書 明日八日、於若宮祝師役事、可令存知給之由、

御氣色候也、仍執達如件、

正月七日

実弘

若宮神主殿

請文 明日八日、於若宮祝師役事、謹所承、早可存其旨候、

以此趣可有御披露候、恐々謹言、

正月七日

若宮神主祐臣請文

追申、被任御佳例被仰下之条、殊畏存候、加御詞可有

御披露候、恐々謹言、

西御門

只今為寺主御房御奉行、明日八日、若宮祝師役事、蒙仰

先無相違候、候之間、殊以畏入候、尚々恐悅無極候、雖可参申入候、

返々日出候、且馳申入候、恐惶謹言、

正月七日

美忍 祐臣

袖書

尚々日来鬱望、無相違申比沙汰之条、殊

畏入候、謹言、

八日、辰刻、一乘院殿御奉幣御退出、大社祝氏人

成藤、衣冠、御師權神主經清御代官也、自去年奉御師、其故ハ、

申賜了云々、其次ニ若宮祝事、勸先例、以

西御門法印申入之間、今則蒙仰了

若宮祝役権預祐世、祐臣之代官也、單一領・軾白布

一段、御幣四手懸之、賜御幣、立歸之時軾給之、

歸祝之後、祿ハ西迎ニ持立之間、西迎ハ下向ニ賜之、

拜屋ノ軒へ上テ一拜、其後交替社役、事了

新薬師御参詣、御車也、

次、広瀬新庄、若宮役祐世、八種御供年預、

社司

八ヶ日若宮役御強物并御節供・御所御参社祝役等、為

代官祐世勤仕之、自晦夜三十八所宿所ニ参籠也、祐堪

参籠、但自七日彼館自一乘院殿被召之間、祐世等南

裏小宿所へ移了、朝拜軾布権預殿ニ為祝言進之、

二日・三日御強物進之、自分ノ若宮八丈、若宮神人

送之間、預殿ニ進之了、

一、自今日八日、菅原殿御参籠、

九日、菅原殿御宿所申入状奉行并寺主好信、即披露了云々、

御参籠之由承及候、就之、御退出之時、若宮祝師役事、

被任代々御佳例可蒙仰候哉、則能長御師得替之

刻、依伺申入候、奈良殿御所御退出之時、大社権神主

經清、若宮者当職蒙仰了、且去年正月御参

籠之時、以一卷注文申入之處、能長依伺申入候、

御治定之間、不及改御沙汰之由、被仰下候之間、忿令言上

候、以此趣可有洩御披露候、恐々謹言、

正月九日

若宮神主祐臣

謹上 弁寺主御房

追申、可参申入候処、憚境御師之間、乍恐捧愚札候、可

得其御意候、恐々謹言、

(5才)

(5ウ)

(4ウ)

(4才)

(6才)

十日、自宝治至于正和五年先例、弁寺主許内々遣之、同日吉書使下着、饗応如例、法中之許入候、吉書了、文章如例、(藤原親)左中弁也、

十一日、自菅原殿御宿所御退出祝役事被仰下、御教書来十八日可有御退出候、若宮祝役事、可被參勤候由、御気色所候也、仍執達如件、

正月十一日

好信

若宮神主殿

追申、如法未明可被參儲也、

請文来十八日可有御退出候、若宮祝役事、可參勤之由、謹承了、早可存其旨候、以此趣可有洩御披露候、恐々謹言、

正月十一日

若宮神主祐臣請文

追申、如法未明可參儲之由、同承候了、被任御佳例、被仰下候之条、殊以畏存候、弥可抽御祈禱候、

私弁寺主解状来十一日御退出若宮祝役事、早速申沙汰候、蒙仰之条、返々畏存候、公私御祈禱弥可抽丹誠候、尚々不知所謝候、兼日被仰下之条、今一重畏存候、相当此春散日来鬱望之条、面目無極候、何様ニも御退出以後參入候て、可畏申候、每事期其次候、恐々謹言、

正月十一日

祐臣

梨子原殿

返事御退出之時祝役事、無相違之条、誠目出候、故如此承候之条、以外候、每事期参会之次候、恐々謹言、

正月十一日

好信

同日、御神事如例、若宮祝氏人祐堪・祐照當番

十五日、御節供如例、社司時実・祐親・祐永・祐世・祐敏・延親・祐益、若宮役祐世、氏人祐堪・祐照、

十六日、田殖如例、雨降之間、夕部遂節云々、

十八日、菅原殿御退出、自八日御參籠、大社祝權神主経清之代官氏人成藤、

若宮祝役代官祐世束帯、祐臣重服之故也、祿物單一領・軾

白布一段、賜御幣、立婦之時、軾ハ交替之、返祝之後、

拜屋ノ軒未申角ニテ祿給之、一拜在之、

此事御參籠之後、九日、任代々御佳例、奈良殿芳仰之

上者、可被仰付之由申入候処、十一日ニ被下御教書了、

十九日、弓会在之、及風流、此四五日在之、

廿一日、御神事如例、社司祐親・祐永・祐世・祐敏・延親・祐益、

若宮役祐親、役送祐益、手長氏人祐堪、

六種役祐世、白杖以下北郷、

廿二日、自大湯屋以有珍、御山ノ弓場者、自古被停止之、而

無其儀、以外事也、就中往生院北辺弓場ニ、為

三方之沙汰可立神木云々、彼所ハ大宮方也、然而

若宮職事モ相向了云々、

廿六日、御山於弓場、郷人ニ交令勝負之由、現行之間、

神人二人加罪科了、

二月

一日、御神事如例、社司時実・祐親・祐世・祐敏・延親、

若宮役祐親、役送延親、手長氏人祐殖、

六種役祐世、祇候氏人祐堪・祐照、

白杖以下南郷、ヤチハマヒク、

三日、神宮預延親西金堂夜莊殿勤仕候、於当職者、

(6ウ)

(7オ)

(7ウ)

(8オ)

無先例之由雖歎申、得分出来之上者、可勤仕之由

被責伏候間、無力勤仕候、予助儀昨日三日、花餅三

枚代米三斗六升遣之、予勤仕之時、延親三枚（助）

成候間、如此致沙汰了、

同日、自衆徒以中堪忍尊、西山庄三方神人可差下、先々

下向之處、不叙用云々、返答、神主数輩之神人奉

行候（毫）、今二方を令申て条、自由沙汰歎之由申候了、

六日、悲母服終、於白亮寺勤之了、数日喪家中日記（毫）

記之了、

同日、新賀・飯室ノ二問ニ答訴陳正文等、院家へ

定使取之了、

十一日、御神事如例、社司時実・祐親・祐永・祐世・祐敏・延親・祐益、

若宮役祐親、役送祐益、若宮祝候氏人祐堪・祐照（祓）當番、

白杖以下南郷、六種役祐世、

同日、御祭如例、社司如旬之時、

開御藏奉出神宝役祐親・祐益、手長氏人祐殖、

奉開御戸備神宝役同前、

若宮役祐親・祐益、御鑑役祐堪、

上卿（三条中納言、神馬神主給之）、弁、内侍

十二日、奉納如例、

東宮御幣少、若宮備進之、祐世申祝了、

十九日、自今日御八講始行、委者在本記、

廿一日、御神事如例、

廿三日、二条殿大納言御局俄御下向、但禪定殿下御女御同道、（藤原兼基）

此亭へ奉入了、廿四日長谷寺へ御參詣、廿五日又是

入御、廿六日御上洛、

廿五日、新勅願御三十講始行、

三月大

一日、御神事如例、社司時実・祐親・祐永・祐世・祐敏・延親・祐益・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐益、手長祐堪、其外祐照、

白杖以下北郷、

一、予自今日出仕、今朝行水、カミ洗之、衣裳ハ綿マテ洗之了、

一、自寺家西南院、三十八所館、為京下女房被召之、雖為

先約無力申領状了、

二日、自一乘院社頭館雖被召候、先日自寺家照（慶門）心院三位

御局為御參籠、自四日七ヶ日被召之間、申領状了、何様

可仕之趣申之了、仍重不蒙仰也、

三日、御節供如例、

福智御供、若宮御幣役行春、散米春名、

菴治御幣春名・宗春、西殿行春・春名、

若宮祝候氏人祐堪・祐照、

四日、長谷寺參詣、亭・予也、日帰也、（三輪・飯室、戻懸神人出酒）

八日、極樂房御幣、白絹、代官祐堪申之、

九日、自今日御八講始行、委者在本記、

十一日、御神事如例、社司、

若宮役祐臣、役送祐益、手長祐堪・祐照、

白杖以下北郷、

十四日、予上洛、若宮千木造替可被忿之由、可被下（前達力）長者宣

於関務して申之了、委者彼記在之、

都花見之了、花下連歌共奉了、前司殿御回達、

十六日(梅)前司殿(影)下方ノ尾御形御拜見了、

十九日、下向、同日民部卿殿父子御参詣、于当社同夜御奉幣、

四手懸御幣、御浄衣也、予狩衣、御奉幣民部卿殿許也、

一貫五百文御下行、御幣料、

酒肴進上之、二瓶子・二懸子、宰相中将殿御通夜、

廿日、御還京(藤原為藤)〇元八行問書

一、去十七日本宮灯炉之辺ニ参詣者小使、祭物三百文送之、

此内六十文祭官使ニ下行云々、

廿一日、御神事如例、社司時実・祐親・祐世・祐敏・延親・祐益・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐益、氏人祐堪・祐照、

白杖以下北郷、

一、今日御供講御供、備進、若宮御幣春名、散米宗春、

吉田御供ノ御幣行春勤仕之間、春名此御供ヲ勤仕之、

一、清方神楽田事、有石室(不審)下テ南郷神人引退テ、赤

藏之前三方会合ニ不出合、酒等ヲ三分テ、南郷取之云々、

然而北郷・若宮ハ如例当座行之了、此由今夕行春・

安氏・春名・宗春来申候、

廿二日、三方藏ニ出合事、猶南郷神人申子細テ、酒等分取之、

北郷・若宮ハ藏ニテ行之了、而内夕部南郷古老者共出合テ、

開藏了云々、

廿四日、自京都祐殖申下云、去廿三日拜任権預了、能春転任

正預了云々、去廿二日祐殖上洛、兼テ能春ニ契約事等

在之云々、其使祐世也、

廿五日、自供目代明日松山庄神人三人可差下、今日可差給云々、

一、長講堂供料催促神人上洛、今日正預事ニ延引了云々、

廿七日、権預祐殖廻文、

〔10ウ〕

来廿九日戌刻、可遂拜賀候、無指合御事候者、可有

御参社也、恐々謹言、

三月廿七日

権預祐殖

謹上 兩惣官并権官御中

若宮神主殿同可有御存知候、恐々、

廿八日、自祐殖之許、被物一領代一貫文・軾代三百文、已上

一貫三百文送之、

同夜御神楽如例、社司時実・延親・祐臣、

若宮役祐臣、役送氏人祐堪、

大行事奉幣、大社時実、拜後之代官也、

若宮祐臣、御幣備進役祐堪、

一、此夜御神事ニ若宮神人小祢宜四五輩之外、

神樂司(守元)清久 神殿守以下、不□□迎□来大行事

奉幣以下御供下役等、神事之違例之間、翌朝他行・

所勞之外ノ神人十人取授処、春親被取之了、仍止出

仕了、

廿九日、権預祐殖拜賀、

自宿所出立、自体束帶、氏人三人、

侍一人、春房、雑色四人、於御祓戸御祓如例、

御幣役春峯上ハヤヒク、其外南郷神人等多々候ぬ、

若宮神人等共奉、自南門入、当家之例也、楼門下

着座、高麗端疊、神主、御幣被取伝、次祐文役也、

大社祝神主時実、懸尻、祿物一重代一貫五百文・軾代

三百文、帰祝如例、

社司腰差五百文、裏紙テ置折敷、

〔11ウ〕

〔12ウ〕

〔12ウ〕

若宮役祐臣、拜屋着座、紫端疊先例也、

御幣役祐文、祐臣懸尻、婦祝、壇上、祿物一領代

一貫文・軾代三百文、祿、南垣下棟北一枚龍力取出之、

役人祐香、

神殿守三百文宛也、若宮分宗春給之、依当番也、

御供日並也、婦立ニ宿所ニテ共奉神人等ニ

酒勸之、又一門人々酒勸也、但予不向、三方神人中

酒肴在之、肴御供云々、

卅日、祐殖成卷前勘了、超越数輩之故云々、氏人等

結構敷、以外事也、

四月

一日、雨降、御神事如例、社司時実・祐永・祐世・祐敏・延親・

祐益・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐益、氏人祐堪・祐照、

白杖以下南郷、

六日、神主許ヨリ見之、

弁寺主状氏人并神人等徳治注進之由承候、能々可有御尋候、

恐々謹言、

四月六日

好信

若宮神人分七日注進候了、

七日、法蓮郷御幣進之、白小袖絹、信方也、

昨日正預廻文、

明日戌刻、可遂拝賀之由、相触候、可有御存知候敷、

恐々謹言、

卯月六日

執行正預能春

進申、若宮神主殿同可有御存知候、恐々謹言、

七日、正預能春拝賀亥刻、自宿所、白杖、春仲、御幣、

春徳、子息、自体、東帯、氏人五人、能藤、能泰、延雅、侍

二人、雑色四人、神人悉取松明了、祓戸祓如例、自

前鳥居・慶賀門、楼門着座、高麗、新儀敷、御幣自神人

之手能泰直ニ取之、

祝役神主時実、懸尻、婦祝之時、祿物一重、役人軾

白布一端、神人請取、經所、予沙汰之、

次、若宮拜屋着座、中柱ノ辺ニ紫端敷也、

御幣役能泰、

祝役祐臣、引尻、指笏、婦祝、壇上、祿、南垣下棟木北ニテ

取之、役人能藤、軾白布一段、神守殿方請取之、

祿物代二貫也、女郎花被物一領遣之、軾、正預

沙汰之、

神殿方五百文、若宮ハ当番給之、

其後婦參大社、八種御供備進之、

又婦立ニ宿所ニテ中臣社司・氏人一会在之、

但祐世・祐殖不向云々、

三方神人中酒肴在之、干鯛三十枚、コフ□□□

九日ヨリ御八講始行、一乘院殿御季頭、委者記本記

了、

十一日、御神事如例、

十二日、夜、花山院大將悅申在之、祝師權神主經清代官

成藤、東帯、庭座也、神馬一疋、若宮役同前、祿軾不見、

同夜臨時祭、勅願云々、祝役神主代官師定、氏人勤

仕之条、以外非例也、

十四日、拜屋南軒ノ溝ニ小便事在之、此郷ノ法漆師、

(13才)

(13才)

(14才)

(14才)

厄病所勞之時、立願ノ小五月勤仕之處、彼子息
小童小便了、アラカヒ申トモ証人等分明之間、承状也、(伏)

十五日、小便祓遂之、祭物七百分、但内々歎申間、三百文
進候、此内六十文祭官役ニ下行之、溝ノハタノ石取
替之了、七百分送文在之、

一、同日般若会如例、雨儀也、莊御供如例、

一 御殿、神主時実、一、正預能春、三、時実、四、權預祐永、
若宮、祐臣、道間役、行春、

行道ノ舞役在之云々、予今日不見物、

社司

時実・能春・祐永・祐世・祐敏・延親・祐殖・祐臣、
若宮祝ハ氏人祐堪・祐照、

同日、自衆徒以琳智、御山新道、犬、社頭ニテ物売買事、

三ヶ条可下知云々、

十八日、供目代許ハ祐臣・延茂罷向、吉田事、学侶評定ニ

可有御披露之由申含了、明日可披露云々、

廿日、春親免除了、

廿一日、御神事如例、社司能春・祐永・祐世・祐敏・延親・

祐益・祐殖・祐名、

若宮役祐臣、役送祐殖、氏人祐堪・祐照、

白杖以下南郷、

五月大

一日、御神事如例、社司時実・能春・経清自今日・泰平・祐世・

祐敏・延親・祐益・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐益、手長祐堪、

白杖以下北郷、

一、自大社去月御八講免田御供鬼橘備進事、社家ノ目安・

泰長返答・神殿守申詞披露了、

二日、自衆徒以中綱幸芸、社頭ヒス形仁事、猶不断絶候条、(異)

以外事也云々、

今日自神主之許、来四日可有般若会之由触之、

三日、夜始楽無之、

四日、般若会俄延引、楽所訴訟云々、其故者、興南院在地

小五月郷役事也、請仰等悉参会、社司同參儲之處、(講御カ)

延引之間退散了、珍事也、同夕伝聞、楽所等可被処

重科云々、

五日、御節供如例、社司時実・能春・経清・泰平・祐世・祐敏・

延親・祐益・祐殖・祐臣、

神戸、御幣行春、散米春名菴治、春名、行春、宗春西殿、

一、五月会在之、為御神事中之間、大社祝時実申之、御幣

社司等支配、

若宮祝祐臣、例座申之

一、昨日延引般若会社家酒肴、今日可被行之間、可參大社

ニ、(三)俄送候間、御節供以後参会大社、祐臣座鳥居

之外東也、祐堪ハ四御殿御間ハ參了、酒膳式如例、

神主ハ退出、鳥子無之、居肴之許也、社司分ハ三居肴、

氏人ハ二居肴也、四五度也、

一、今日在京神人下向、

六日、小五月參勤如例、今日五村參勤、

七日、又參勤也、

八日、參勤、今日京終・木辻・城戸、昨日、拝殿召返招請之間、

帷二衣懸之、

(15才)

(15才)

(16才)

(16才)

九日、田楽參勤事、重服ノ童田楽千福丸、勤仕事、有其沙

汰之間、拜屋并北南庭中難治、若令參勤者、可有

清祓由、自是令申之間不參也、昨日棟本マテハ彼服者

遊之了云々、

十一日、御神事如例、社司時実・能春・経清・泰平・祐世・行忠・

延親・祐益・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪・祐照、

白杖以下北郷、

一、今日来廿一日楽所番ニ相当之間、旬御供出大社了、

十二日、春名例酒進之キ、干鯛三、酒一瓶子、

十四日、春種来申云、拜屋東軒ヨリ蛇落敷、物カナリ

ケ問見之ニ蛇在之云々、不及言上、

十五日、自松林院使長勤房、宗康白人神人之由、寺

家へ可被拳状之由、被仰之間達之云々、

当社領河内国田原庄土民白人神人宗康申状、謹

進上之候、子細見状候、又以此旨可令披露給候、恐々謹言、

五月十五日

謹上 同間房得業御房

十八日、清水寺神人西園寺殿へ申拳状候間、宿所伊予守泰平、出拳状了、浅

津庄神木穢事也、○元ハ行問書

十九日、自寺家明後日為最勝講証義御上洛之料、被召馬、

但次人御等務ニ御上洛馬致沙汰事、無先例之間、

難治候令と申候了、

廿一日、御神事如例、社司時実・能春・祐敏・祐益・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、氏人祐堪・祐照、

白杖以下北郷、

廿四日、予通夜、若宮南壇也、

廿五日、御間一童北、小便事在之、如法無泳之間、依歎申

湯帷一出之、仍三十文神殿守等ニ下行了、此帷可

二三十物也云々、

廿七日、屈屋西宿所上へ樸木枝落懸テ、打破了云々、

廿八日、乙鶴殿与神人永職勝事在之、永職道端ニ大

便ヲスル間、此兎トカメテツフテニ打之処、彼神人

立アカリテ腰刀ヲヌカシムトスル間、兎何モ不持之間、

刀ナト取テ欲馳向之間、侍從殿エトリ□□了、

六月小

一日、御神事如例、社司時実・祐親・経清・泰平・

祐世・祐敏・延親・祐益・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪、其外祐照、

白杖以下南郷、

今日本旬、塔内殿恒例分ニ進之、

二日、对于兎狼藉神人永職被解神職、被破却

縁舎了、

三日、夜南曹弁顯親被放氏了、社司能春・

延親・祐殖、是へハ自衆徒も不被觸了、

四日、檜垣庄八尾、百姓申状地頭非法事、出拳状了、

名主四人祐臣・祐永・延親・祐益、地主但馬公、許へ

連署状にて遣之、但馬公所望也、

五日、神主廻文、

来八月十九日可有御參詣春日社、任例可令存知者、

御旨如此、遣之、以状、

六月四日

(藤原光業)
右少弁在判

(17才)

(18才)

春日神主館

七日、未刻、番神人來申云、若宮壇ナキノ木ノ枝ノ拜屋ニ

指懸テ候、ワニ、ト成候間、自竹中出候テ見候ヘハ、蛇

下ニ候テ、東壇ノ石間エ入候了云々、マサシク落テ

不見候間、不及言上、

八日、重經京都ヘ差上候、御參宮金銀御幣并千

木造替事、申状注文書等ヲ進之候、右少弁殿光業

奉行ニテ申之、又治部卿殿内々申之了、治部卿殿ヘハ、

千木事自最前沙汰次第注文進之了、

十日、重經下向、右少弁殿御返事在之、千木事念可有御

奏聞、金銀神馬事を可被仰下候、治部卿殿ハ弁殿返事ト
同事之間、右状候云々、

同日、戌刻、若宮瑞籬未申男柱ヨリ、羽蟻出現ニテ候、

先度言上之時モ不被下御占形之間、不及言上、

十一日、御神事如例、社司時実・能春・経清・泰平・祐世・祐敏・

行忠・延親・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪、

白杖以下南郷、

十三日、前権預祐峯他界了、生年七十三、
不食所勞云々、

十七日、自衆徒以定実西山庄ヘ神人可差下定日等事、

神主存知云々、

十八日、右少弁殿并治部卿殿ヘ金銀御幣并千木造

替事催申了、

同日、春名來申云、今日手水屋宗景と云々、其次ニ行事

寺僧ニ同屋ノ西ノシトミノツリ金、念可被其沙汰之由

申之了云々、

十九日、朝自衆徒以有琳伊賀国阿賀ヘ敵方可乱入、即

(19才)

政所可焼失云々、仍傍庄等ニ触申候、久多村社領

候歟、若然者可見続可加下知云々、

返答申云、久多村者三方知行之所候、今二方ヘモ

可被仰候歟、於自分者可相触候申候了、

廿日、久多村神人三方三人下向、小目田孫太郎檢断事

為沙汰也、其次二十九日自衆徒下知之旨、下知了、

廿一日、御神事如例、社司能春・祐世・祐敏・延親・祐殖・

祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪・祐照、

白杖以下南郷、

一、今日能長披露、来廿三・四日両日夏季御神樂可被

行之云々、御教書廻文略之、

一、神主披露御春日詣事、

来八月十九日 殿下御春日詣事、被 仰下候間、如此

同例可被存知之由、依 仰執達如件、

六月廿一日 春日神主殿 權寺主珍乘

来八月十九日可有御參詣春日社、同例可令存知給之由、

六月四日 関白殿御消息候也、仍上啓如件、 右少弁光業奉

謹上 興福寺別当僧正御房

一、今朝自衆徒以中綱禪智御山新造事、先度触申

了、而于今不被塞之条何様哉、次ニ鳥居南ナル

道自往古在之歟、如何、

廿三日、松林院御弟子大納言禪師御房、御夏行始ニ御參社大宮、

御幣一帖一連、〇元八行間書、祝師祐臣、

御幣一帖一連、〇元八行間書

(20才)

廿三日、自衆徒以中綱性賢南曹并放氏事、自上種々

被開 仰候間、続氏了云々、但南曹ハ可被代替云々、

一、同夜御神樂如例、社司能春・祐世・泰平・延親・祐殖・祐臣、

祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手永、白杖以下南郷、

大行事奉幣、大宮能春、能長代官也、若宮役祐臣、

廿七日、自衆徒以中綱幸芸就塩田・神護寺事、北

畠中納言(親房)為問答、来廿九日神人三方一人畏可差上

京都、同者清廉之仁ヲ可差遣別会五師之

辺、問答之様ハ、可校之間、若五師有子細、併如件

中納言得業御房之許ニテ可伺申云々、

廿七日、教養院御夏行始御參社、兩方祝祐臣、

御幣三帖・軾代追可被遣候云々、

廿九日、自衆徒以幸賢、本神戶楠原ニ今日武家可入申

由有其聞、三方神人三人差下之、依何事哉之由

可問答、即百姓等ニモ不可叙用之由、可加下知、又武

家へ使者ハ誰ト云仁と尋テ、可申散狀、不云順、清廉ノ

神人ヲ可差下云々、下向神人对馬殿之許可来云々、

七月大

一日、御神事如例、社司時実・能春・祐世・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪・祐照、

白杖以下北郷、御供十二度、

三日辰刻、東北院御宮廻、三七日 御參籠、大宮祝、

若宮祝祐臣、衣冠、祿軾七百文、夜前被送之、

御幣四手懸、ハ自御宿所五本進之、

四日、千木・金銀御幣等事、舜教房ニ申之了、早可

披露云々、

七日、御節供如例、社司時実・能春・経清・祐世・祐殖・

祐臣、

若宮御幣、散米、行春、春名、神戶、行春、春名、小田中、春名、春名、西殿、行春、春名、

若宮祝(感)候氏人祐堪・祐照、

八日、千木事、寺官上洛ニ衆徒申上了云々、

同日未刻、西御門法印実忍他界云々、

九日、被召一乘院、奉行弁寺主、来月十九日御春日詣、

神宝等被略之由、被仰下敷、而若宮神主訴申衆徒

云々、何様哉云々、先神宝被略之由、未被仰下候、

但諸事被略之由就風聞、衆徒御略儀不可然候

由、可申由聞候間、若被申之者、若宮金銀御幣

毎度訴申事候、御例モ少々不明之上者、被加詞候哉

由者、内々或沙汰衆ニ語申候き、全以身ニ惣事不

訴申候之由申入之間、可罷婦之由被仰出之、

十一日、御神事如例、社司時実・経清・祐世・祐敏・行忠・

祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪當番・祐照、

白杖以下北郷、

十三日、自寺家御參宮着到殿指図等事、可注進候

由、以状被仰之間、神主披露之、寺家御状今度御參

宮日記ニ在之、

十四日、矢田庄下向神人召捕事、神主之許ヨリ寺家

御教書公文状、見之、

大和国矢田庄地頭代貞齊訴事、春日祢宜請

文加一見返進之候、此請文者、曾而武家不可請取候、

(22才)

(21ウ)

(23才)

(22ウ)

召様可相尋子細之由申候時、忿々免状上、可明申
取分不作者可勤也、仍返進之候、又余人奉行分
事未被申候、早々相尋可被申由、定相觸給候歟、於
此請文者、難被遣武家へ状候也、仍内々如此令申候、
恐々謹言、

七月十二日

琳乘

春日祢宜請文何様ニ申哉、不承之、

十五日、朝自一乘院殿被召、奉行弁寺主、御參宮事、

所存相残者上へ可申沙汰之處、訴衆徒之条、所存何
様候哉、且 長者奉。忽緒ニ相似歟云々、御返事申云、
於所存者、曾而無存旨候、只若宮金銀御幣等事、

御例区々之間、每度。事為社務執申候条、先例候、仍

今度も執申入候最中ニ惣ノ御略式事、衆徒ニ

執申候由風聞之間、便宜之時、若惣ノ御略式被

執申候者、若宮金銀事被申候哉之由、内々令

申候き、但若宮分ハ今度寺官ニ不執之上者、訴衆

中事無其儀候、且内々あらまし申候分ニつきて、

今預御不審之条、不便事之由申候処、不及申入、

先可退出之由被申也、仍退出之次ニ、舜教房ニ対面、金

銀御幣事、若宮事、不執申之由申也、

同日、御節供如例、社司時実・経清・祐世・祐敏・祐殖・

祐臣、

乙木若宮役春名、遠春、いワウ、春名、宗春、

今日国清ニ召捕事委細ニ加下知了、

十六日、治部卿殿へ千木・金銀事驚申、御返事ニ被上洛之由

被仰下、

(23ウ)

十八日、吉田御參宮臨時米事、百姓解ニ兩名主拳状ニテ

修理目代琳淳房僧都、許遣之、忿相尋小目代、可申左

右云々、百姓解・拳状等在別紙、此間小目代ニ直雖

問答、不事行問、及訴訟了、

十九日、仕丁為衆徒被罪科了、縁舎社公人之間、衆徒ハ

不向云々、牧宰事云々、

廿日、被召禪定院奉行越中、都維那、千木事也、委者千木日記ニ

書之了、

一、今日重經下向、昨日廿日、代官ニ重經ヲ差上之處、為右

少弁殿御奉行、自体可上洛、金銀御幣事、相觸

衆徒之条、不可然之由被仰出云々、

廿日夜、梨子原弁寺主許罷向テ、自 長者被召之、

此事自 院家御尋題目自候、院家ニ被聞食、開

其状御一行可上洛之由、歎申入之處、忿可申入由

相計問、悦申テ帰了、

廿一日、朝愚状ヲ弁寺主許へ遣之、忿可披露云々、則

同日一乘院ニテ、御返事之趣申之、御一行者、寺務

之外難治、内々ハ可被申之云々、

同日、御神事如例、社司、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪、白杖以下北郷、

祐臣參一乘院旬御供以後、了、六種役祐殖、

今日孫百日、食初在之、

廿二日子刻、予上洛、午刻京着、予右少弁殿ニ申之処、

明日可參御所云々、但同夜弁へ參テ、此間次第

所存分能々申了、

廿三日、參 長者御所、被 仰出旨、御參宮事、任先規有

(24ウ)

其沙汰、御当職之時者、若宮被進金銀事無先例、
太閤御時者有例歟、其時者さ申候てあらんすらん、
而相尋衆徒之条不可然、為傍輩向後可有其沙汰之
由、先日代官上洛之時、被仰了云々、御返事ハ、都以
不相觸衆中候、則若宮金銀事、衆徒不執申之

(25ウ)

上者、仰高意候、猶御不審候者、可有御尋衆中へ、
所詮候、被閣千万之子細、可然候様、可蒙御意候、京

宮御祈最中之千木事、御沙汰又無寸隙候由申

入之処、御返事無之、弁先可下向、御左右ハ状

などにて可被不審申之由被申候間、廿四日下向、

重經・春者・夫一人、三日病之間、宿所ニ留置了、

今度臨時夫春名ニ召之、今一人夫ハ春秋カ、

今度分夫也、

廿五日、朝弁寺主許向、京都御返事様申之了、其

趣又状ニテ遣之、忿披露云々、

同夜、能泰山辺へ招登之間、対面之処、自京都

昨日状ヲ給たる事ニ候と見之、わかミヤの神ぬしも

ハやかハリ候へきに、さたまりて候へ、御所まう候へましき

やらんと御文也、廿日日付也、名ハ破テ不見示之

条、返々悦申候了、

廿六日、又此仮名文事、申弁寺主了、忿又可披露云々、

愚状等事繁之間不記之、別紙ニ悉在之、

同夕方、御所御返事弁寺主ニ尋申候処、内々ハ被申候歟

と申候、其返事も在別紙、

廿八日、夜能春招之間、対面之処、此事経請之許、廿六日

近衛殿祇候仁、若宮神主事有御沙汰、相定祐殖、忿

(26ウ)

可上洛之由申下之間、則祐夏・経清上洛了、氏人も集
会許評定候しなとも身ニハ申異儀候了、申状両三人ハ
入テ候と覚候、但此事承旨候、御悦ニテ候也、定被聞

食候歟之由申候間、返々悦入候とて、悦事未所及候、いか

にと被聞食候哉と申処、御所さまにて承候、此条

大明神も御覽候へ、一定候と申候、廿七日ニ右少弁殿此事

御沙汰何様ニ候哉と申候処、今日廿八日、使者非番下向、明日

可申入、後日ニ可尋之由御返事在之、

廿九日、朝弁寺主許向、傍輩競望事、又能高へ説語申之、

忿昔原殿へ可参候由申之間参之、奉行参了、被仰出云、侍從殿、

此事委被問答了、但最前申し候ハ、衆徒ニ訴事

無之、但便宜之仁ニ難申之間事在之由申候き、仍此条

衆分ニ有御尋之処、祐臣披露之由申間、長者へハ

自是被申了、然間若宮事をこそ申さねとも、

衆徒申子細者、汝か所為と上ニ被思食間、以外御沙汰ニ

及了、但御祈禱申之条、不便ニ被思食之上者、最前ニ

如令申、内々便宜之仁ニ申たる事ハ候き、其条実身

了、今度不覚候、此段者可有御免候、其外奉対

長者都以無所存之由、起請如状ニテ、此御所へ可進、以其

いかにも京都へ可被申候ハ、慇懃ニ被仰出之間、返々

畏入候、併此御計神慮と存候、忿可書進之由、能々

申候テ罷歸テ、則仰之趣同日、書進了、弁寺主又忿や

かて可進之云々、

御参宮御略式事、相触于衆徒候て、就被聞食、預御尋

候之間、都以無其儀之由、再三言上事送候了、但此度御略

式事、衆徒可申子細給之由、今聞食候間、或仁内々対面

(27ウ)

之時、若惣而略式可被執申者、若宮金銀御幣事、

當時難申入候、被入題目候事、何様候哉之由雖申出候、

内々只あら申候間、彼仁も不及披露于衆徒候云々、仍

若宮金銀御幣事、寺官上洛之時、不執申候歟、但内々便宜之

仁に申含候条、返々身の今度不覚之至、無申限後

悔仕候、於此段者、枉平可蒙御優免候、且奉対 長者

都以不存不忠不憚私曲候、只今度為御調献于若

宮候者、可為末代御佳例候と相存許候き、其外全無

所存候、此条若為遁身之難候申虚言候者、可被蒙奏

五所大明神并七言^(堂)三宝神罰冥罰於祐臣身上候、

此上者、被閣千万之子細、無相違候様、其御沙汰候者、弥可抽

御祈禱之忠蒙候、以此趣可有御披露候、恐々謹言、

正和五年七月廿九日

若宮神主祐臣書判

謹上 弁寺主御房

至院家三長者

此間開申之趣者、此状ニ同前也、仍不書置、但

在別紙、

晦日、河口上分請之、一石代壹貫百十一文九升^(結)、慎解云々、

謹請 河口上分事、

合

八木壹石^{去年分}、

右若宮御分、謹所請如件、

正和五年七月晦日

若宮神主祐臣判

八月

一日、御神事如例、社司時実・祐永・祐世・行忠・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長祐堪・祐照、

白杖以下南郷、

今日旬御供、二瓶子、東北院進之、

今日御五会一具、二瓶子、謹而進上之、以此趣可有御披露

候、恐々謹言、

八月一日

祐臣

御返事 大夫公御房

一具、両瓶入見參了、返々目出候、可申下也、

恐々謹言、

八月一日

光専奉

袖書 故甘番被遣候者、同可申旨也、

四日、弁寺主許罷向之處、昨夕御返事到来候とて読之、

若宮神主事、雖難儀候、如此歎申候上者、被閣之由被仰之

云々、返々畏入候、今夕歟、明旦歟、菅原殿可參申入由申了、

同夕菅原殿奉行侍從公状給之、

取證 抑内々被歎申候間事、御人苦存候之處、自此 御所、先日以内々

状種々被申候了、今度事、重々雖難儀候、如此申候

上ハ、御無沙汰にて可被閣之由被申候、恐々謹言、

八月四日

信明上

五日、早朝參菅原殿へ、今度事、忝御計無相違之被仰

下之条、返々畏存候、弥可抽御祈之忠之由、申入了、御返事^(29ウ)

種々被申被閣之由被仰候、返々神妙ニ被思食候、御參

宮無為無事、家門御事可申御祈禱云々、

十日、修理所へ付吉田大領時米、祐臣・延茂罷向、又十余輩

使者ヲ被差下之条、不便之由申候、小目代ニ猶可相触云々、

同夜為御參宮御祈、三社奉幣御使下向、雅俊子息云々

十一日、御神事如例、社司時実・経清・祐永・祐殖・祐臣、

若宮役祐臣、役送祐殖、手長氏人祐文、若宮給者^(職候)

氏人祐照、白杖春清、自余同郷、

十二日、祐臣・延茂參寺家奉行隆見房得業、吉田領時米

事、小目代沙汰次第申候、所詮可召上使者候て、可有

御下知候由申候了、御返事云、忿可召立候て御下知了云々、

十五日、夜小会在之、

十六日、朝ヨリ三病予始之、十八日夕部ヨリ聊向減、

十八日、吉田事ニ延茂・祐堪參、又入使者譴責之間訴申之、又可召上之

由御下知了云々、

依奉行之許、進入申状了、

十九日丑刻、御參宮、雨儀也、二年二月二十七
去仁安之外、無此例歟、

委者載本記了、

廿一日、御神事如例、社司、

若宮役祐臣、役送氏人祐堪・祐照、白杖以下南郷、

一、今日教養院御願書於社頭奉読上候、御殿御簾裏

御戸長押ニ奉納候、去十二日社參院至了、

廿五日、一日大般若被行之、御幣絹白平絹懸之、予參勤、

御幣料一果、廿三日送之、

同日、一乘院へ被召、代官祐堪參、奉行弁寺主、辰市今日頭

事、可勤仕由御下知了、可存其旨云々、此事自去廿三日

祐徳・祐仲等相触之間、一乘院へ參申入了、正預不相綺

之間、以外無沙汰等申候、

廿二日、長者二条殿被補任云々、

廿五日、自衆徒以中綱幸芸、為祭礼別会五師不申間、神

人雖為何人可差遣云々、

廿九日、清水寺神人清久重申状、西蘭寺殿へ執申了、申状等別

紙在之、

○以下続く

〔付記〕JSPS 科研費 18H03583・24K00116 による成果の一部である。
校正にあたっては、ジョージ・ウオラストン氏のご助力を得た。

〔30才〕

〔30ウ〕